

Ⅷ. 小菅訓導遭難事故と諏訪形

『諏訪形誌』150～151ページに「5 小菅訓導殉職記念碑」として、以下のような記述があります。

小菅訓導殉職記念碑



北浦地籍（諏訪形水防庫東側）の千曲川堤防沿いに、小菅訓導の殉職記念碑が建立されています。この碑は、白壁づくりで、高さは避雷針部分を除いて10.55メートルです。

昭和4（1929）年4月24日、遠足帰りの上田市尋常高等小学校本校部（現第二中学校）の一部の生徒たちが、近道をするために中州に架かっていた仮の板橋を渡り始めました。引率の教師が注意をした矢先、ひとりの生徒が誤って水かさの増す千曲川へ転落し、流されてしまいました。これを目撃した引率の教師のひとり、小菅武夫がすぐさま救助に向かい、やっとの思いで生徒を助け同僚に託しました。しかし、小菅は疲労と雪解け水の強く冷たい水流によって岸边にたどりつけずに水中に没してしまい、翌日、変わり果てた姿で発見されました。享年23歳、教師になって1か月足らずでした。

現在の小菅訓導 遭難記念碑

我が身を犠牲にして教え子を救ったという行為に対し、上田市をはじめ各地の多くの教育関係者、市内の新聞社三社などが中心になって広く義援金を募り、殉職現場近くの千曲川河畔に殉職記念碑を建立して、永くこの偉業を後世に伝え、現在に至っています。

建立当時の記念碑

殉職記念碑の構造は基壇部を除き躯体はコンクリート、モルタル塗装洗い出しという工法で作られ、三段づくりに構築されています。初段の基壇部は高さ2.7メートル、幅2.7メートル、御影石積み、正面には武夫が昭和4（1929）年3月に、上田青年誌に寄稿した「本願晩鐘」の最初の部分が、銅版に刻まれ、はめ込まれています。また、右側には建立に至った経緯が銅版で、背面には工事請負い業者二社の名前を黒御影石板に線刻したものがそれぞれはめ込まれています。中段部分の正面には、灰黒色の石板に、東京文理科大学（現 筑波大学）教授文学博士中山久四郎による、900字にも及ぶ殉職に至った経緯を記した文章が線刻されています。上段は直径1.58メートル、長さ3.6メートルの円筒形で、正面には一辺40センチメートルの正方形で灰黒色の石板6枚に、正三位勲一等学習院長荒木寅三郎が、力強い書体で「嗚呼小菅訓導」と揮毫をしたものがはめ込まれています。



小菅武夫の墓は上田市新町の向源寺にあり、墓碑の形は殉職記念碑をミニチュア化したものです。また、小菅武夫については「小県上田教育会館」内の「信州上田ふるさと先人館（入館無料）」でも紹介されています。

小菅武夫訓導とはどのような人物だったのでしょうか。『上田の「教育」を支えた人々 2009 Ueda City Multimedia Information Center All Rights Reserved. (<https://museum.umic.jp/jinbutsu/data/O10.html>) 』から引用（一部加筆修正）します。

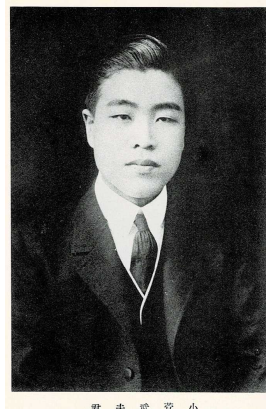
小菅武夫（こすげ たけお） 1907－1929

小菅は、明治40（1907）年に上田市木町に生まれました。大正9（1920）年、尋常科を優良の成績で、しかも6か年皆勤で卒業し、受け持ちの先生からは東京の中学校への入学を勧められましたが、家業の都合で高等科へ進級しました。大正11（1922）年、高等科を卒業しましたが、ここでも皆勤で成績優良のため、時の校長と受け持ちの訓導に進学を勧められ、小諸商業学校第3学年に編入しました。

大正14（1925）年、小諸商業学校を成績優秀・精勤で卒業し、校長が東京第一銀行に推薦をしてくれ、本店の書記補として就職しました。大正15（1926）年には第一銀行室町支店の書記となり、月俸も上がり、妹が上田高等女学校（現上田染谷丘高等学校）に合格し、学資金として毎月5円を5年間送るという誓約書を送ったといひます。昭和3（1928）年1月に病気になり銀行を退いて上田に帰り療養に努めました。その後、昭和4（1929）年に上田尋常高等小学校の代用教員として再出発をし、商業科を担当して日々反省をしながら熱心に指導に取組みました。

小菅は小さい時からキリスト教に興味を持ち、その影響を受け、様々な体験や勉強を通して「人間とは何か」「人生いかに行くべきか」を真剣に考え続けました。そして、最後に到達したのが「絶対的愛」の自覚でした。それは有名な「本願」としてまとめられ、昭和4（1929）年に上田青年誌に寄稿しています。殉職の19日前のことです。

4月24日、須川、鴻の巣方面へ春の遠足に行きましたが、解散後雨模様の天候となり、千曲川堤防上を歩いていた児童たちの一部が、鉄橋の上方50mの仮の橋を渡り始め、近くにいた小菅は驚いて「狭い橋は危ないぞ」と言って止めようとしたのですが、まもなく1人の児童が板と板の継ぎ目から足を踏み外して川の中に落ちてしまいました。児童は水面をたたきながら流され、小菅は「今行くから待っておれ」と口走りながら上着を脱いで川の中に飛び込み、ようやく児童に追いつきましたが、児童が夢中で小菅にしがみついたので、二人は流れに押し流されていきました。後から泳ぎ着いた恩田訓導に「頼む」と叫びながら小菅は川の中に沈んでいきました。雨降りの暗い夜、警察や消防など大勢で一晩中探しましたが小菅は見つからず、翌日、学校職員14名が川の中に入りようやく探しあてました。小菅は極めて平安な面持ちであったといひます。



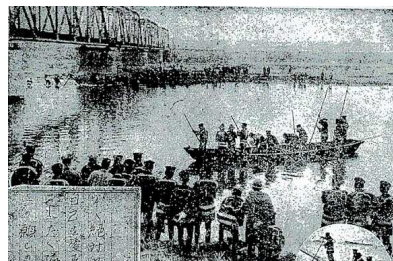
小菅 武夫 君

昭和5（1930）年11月、遭難現場に「殉職記念碑」が建てられ、正面に「本願」の第一節が刻まれており、小菅訓導の精神は今も生き続けています。

この事故で、転落した少年を実際に救助したのは「かっぱの由さん」と呼ばれていた、諏訪形の窪田由太郎さんという方だということが知られています。窪田さんは後日、小菅訓導の同僚恩田訓導とともに人命救助で表彰されています。なお、窪田さんは、諏訪形にお住まいの木内かず子さんのおじいさんに当たる方で、当時、川砂採集などの作業をしていてこの事故に遭遇し、千曲川に転落した少年を引き上げて小菅、恩田両訓導に引き渡した、とのことようです。

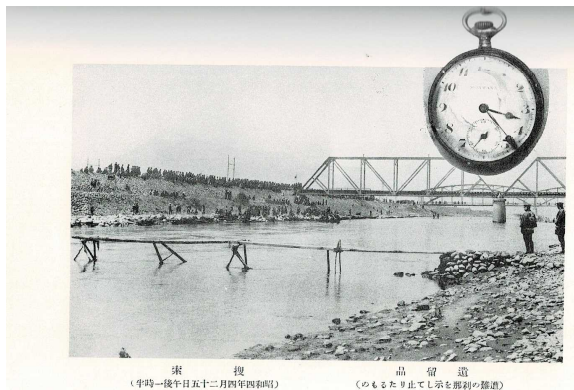
小菅武夫訓導の遭難後、大規模な捜索が行われました。また、「信濃毎日新聞」などでも大きく報道されました。特に4月26日の信濃毎日新聞では遭難の経緯から捜索の様子を次のように伝えています（大意）。

警鐘によって出動した全市約千名の消防隊を中心に、付近町村の消防と青年団員が出動して捜索を行った。小学校でも高等科の児童男子四百名が教師に引率され、沿岸を捜索した。遭難した少年の住む柳原地区からも馬数十騎で現場に駆けつけて捜索を行った。三好町地区の女性たちも主に後方支援に当たった。また、諏訪形の製糸工場では直ちに操業を停止し、婦人会員と協力して炊き出しを行った。



しかし、捜索のかいなく、小菅訓導は事故の翌日午後、上田橋付近で発見されました。小菅訓導の葬儀は5月4日「学校葬」として行われました。

また、現在では考えられないことですが、当時の信濃毎日新聞紙面には小菅訓導に助けられた少年の氏名や顔写真、本人の憔悴した様子まで掲載されています。なお、この少年は第二次世界大戦時に戦死しています。



東 堤 品 留 道
(平時一後半日五十二月四年四和昭)

遺品の時計

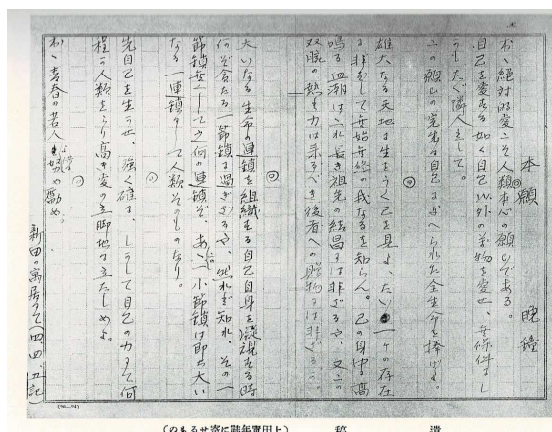


(日四月五年四和昭) 儀 葬 校

学校葬の様子

諏訪形の千曲河畔に建つ「小菅訓導殉職記念碑」には、小菅訓導が『上田青年誌』に寄稿した「本願晩鐘」が刻まれています。右の写真は「本願晩鐘」の自筆原稿です。

右写真は小菅武夫先生殉職六十周年
「小菅武夫君」復刻版
(上小教育会)より



(のをもるせ密に誌年青田上) 稿 遺

本願

○ おゝ絶對的愛こそ人類本心の願ひである。

自己を愛する如く自己以外の萬物を愛せ、無條件にしかもたゞ隣人として。

この願ひの完成に自己に與へられた全生命を捧げよ。

○

雄大なる天地に生をうく己を見よ、たゞ一ケの存在に非ずして無始無終の我なるを知らん。己の身中に高鳴る血潮はこれは長き祖先の結晶には非ざるや、又この双腕の熱と力は來るべき後者への贈物には非ざるか。

○

大いなる生命の連鎖を組織する自己自身を凝視する時、何ぞ貧たる一節鎖に過ぎざるや、然れど知れ、その一節鎖無くして之何の連鎖ぞ、あゝこの一小節鎖は即ち大いなる一連鎖にして人類そのものなり。

○

先自己を生かせ、強く確に、しかして自己の力にて何程か人類をより高き愛の立脚地に立たしめよ。

おゝ青春の若人よ共に務め勵め。

新田の寓居にて (四、四、五 記)

【コラム 小菅訓導殉職記念碑の建立と昭和恐慌】

小菅訓導殉職記念碑が建てられた1930（昭和5）年は世界恐慌、昭和恐慌の真っ最中にあたります。当時、諏訪形でも農蚕物（繭や蚕種、生糸など）の価格低迷によって現金収入が減少し、経済的に厳しい状態になっていたことと思われます。人々の現金収入を確保するための対策として、千曲川の護岸工事などが行われました。

このような経済状況の中での記念碑建立となりましたが、長野県内外の教育関係者や市内各区（現在の自治会）などからの義援金は、7036円95銭であったと記録されています（上田市立博物館の資料による）。

城下地区の各区（現在の自治会）からはそれぞれ、小牧区35円、中之条区54円、御所区26円、三好町区10円などの寄附が寄せられました。また、御所や中之条の青年会からもそれぞれ3円、城下婦人会からは20円の寄附がありました。

ところが、記念碑建立の地元である諏訪形区からは、区としての寄附はありませんでした。諏訪形はそれだけ、昭和不況の影響が大きく、経済的に苦しい状況にあったということなのかもしれません。また諏訪形には、上田市から殉職記念碑を建てるための土地、40坪（約130㎡）を寄附してほしいとの要請がありましたが、これについても寄附を断り、600円で売却したという記録が残っています。

本区（現在の諏訪形自治会）では寄附を行わないということでしたが、当時は諏訪形の一部だった須川の青年会では2円の寄附を行っています。また、諏訪形区でも区や青年会としてではなく「有志一同」というかたちで15円の寄附を行っています。